

第1回安房地区地域協議会 記録

- 1 日 時 令和5年1月6日(金) 午後2時から4時まで
- 2 場 所 館山市中央地区学習等供用施設(菜の花ホール) 第1・第2集会室
- 3 出席者 16名/16名
- 4 概 要

(1) 座長の選出

座長に廣部委員を選出

(2) 地域協議会設置の趣旨

地域協議会設置の趣旨について事務局より説明

(3) 「県立高校改革推進プラン」及び「第1次実施プログラム」について

資料3「県立高校改革推進プラン及び第1次実施プログラムについて」に基づき、同プラン及び同プログラムの内容について事務局より説明

【座長】

事務局からの「プラン」及び「プログラム」の説明について、質問や意見をお願いしたい。

【委員】

適正規模について、1学級の人数は何人を想定しているのか。

《事務局》

40名である。

(4) 安房地区の現状と課題

資料4「安房地区地域協議会 基礎資料」に基づき、安房地区の現状と課題について事務局より説明

【委員】

学区外の市町村から通学する生徒に対して、何か通学の支援を行っているか。また、県内で通学の支援を行っている例はあるか。

《事務局》

通学の支援は特に行っていない。

【委員】

長狭高校の医療福祉コース、安房高校の教員基礎コース。進路としてその系統の大学に進んだとか、卒業後に実際に教員になった割合はどうか。

《事務局》

追跡調査を行っているので、次回までに資料を用意する。

【委員】

11ページの自治体別進路先の数字は、中学校から報告が上がってきたものか。館山市から第9学区へ進学した人数が0であるが、木更津高校に進学する生徒が例年いると聞いている。

《事務局》

各中学校から報告のあった数字をもとに資料を作成している。ただし、現段階では速報値を資料として用いているため、確定値となった段階で数字が変わる可能性がある。次回までに確認する。

【委員】

14ページについて、基本的に郡部から都市部へ中学生が流れる傾向にある中で、第4学区から第5学区へ流れていることについて、その背景があれば今後の参考にしたい。

《事務局》

こちらについても各中学校から報告のあった数字をもとに資料を作成しているため、中身について次回までに確認する。

(5) 質疑

【座長】

ここまで、事務局からの説明を中心に進めてきたが、ここからは全体を通じて質問があれば伺うがいかがか。

【委員】

いろいろな高校で新たな学科やコースを設置している中で、安房高校の英語科は廃止されている。英語を中心に勉強したい生徒にとっては、学区内にそのような学校がないため学区外の学校に進学せざるを得ない。国際化が進む中でなぜこのタイミングで廃止されたのか理由を教えてください。

《事務局》

安房高校の英語科は、志願者が募集定員を満たさない状況が続いていたことに加え、安房地区の中学校卒業生数の減少も見込まれていたことから、学科として維持が困難であると考え、英語科を平成25年度から募集を停止した。志願者の減少は入学後に希望者を募って実施するコースと違い、学科については出願時点で選ばなければならないことが原因であると推測される。なお、英語科の学びは、普通科において国際社会に貢献する人材の育成に努める学びを導入することで引き継いでいる。

【委員】

安房地区に今後英語に関するコースが設置される可能性はあるか。

《事務局》

中学生のニーズを踏まえて検討していくことになる。

【委員】

安房高校では現在、英語教育拠点校に指定されている県下約10校のうちの1校であるとともに、グローバル教育推進校にも指定されており、国内外の大学と連携した取組を行っている。

【委員】

かつては私立高校よりも公立高校へ進学する割合が高かったように記憶しているが、現在は就学支援金制度により私立高校進学者にも経済的援助があり、さらにはバスの送り迎えがあるため私立高校を選ぶ割合が増えている。なぜ私立が選ばれるのかについてはもっと探っていけないといけない。安房高校の英語科の話があったが、英語に力を入れて学びたい中学生が君津管内の私立高校を選んで進学している現状もある。経済的負担があまり変わらなくなってきているので私立を選びやすくなっているという現状に対して、県立高校も何らかの手を打たないといけないと感じる。

【委員】

県内にどんな学科やコースがあるか、それらを設置した効果はどうだったのか、などがわかるような資料、例えば卒業後の進路実績などがあると、それによりニーズがあるのか、あるいはないのかわかる。

《事務局》

プラン冊子38ページにある県内の学科・コース設置校の一覧をご覧いただきたい。県内の配置状況については、41ページから50ページに学科ごとに記載している。評価については、設置後3年目に、最初の卒業生が出る段階で評価を行っており、県教育委員会のウェブサイトには報告資料としてあげている。報告資料は毎年度作成しており、毎年4～50ページにわたるものなので、参考資料として用意できなかった。委員の皆様にもどのような形でお示しできるか、持ち帰って検討させてほしい。卒業後に進学した大学・専門学校の分野や就職状況については把握しているが、大学等を卒業した後の進路まで追跡調査を行っているのは教員基礎コースと医療系コースのみである。

【座長】

他になければ予定時刻のため、次に進む。その他、議事はないか。

(意見なし)

ないようなので、進行を事務局にお返す。

第2回安房地区地域協議会 記録

- 1 日 時 令和5年2月9日(木) 午後2時から4時まで
- 2 場 所 千葉県南総文化ホール 大会議室
- 3 出席者 15名/16名
- 4 概 要

(1) 第1回安房地区地域協議会の記録(案)について

委員に確認し、承認

(2) 「県立学校改革推進プラン」再編対象校に係る成果と課題について

資料1「県立学校改革推進プラン再編対象校に係る成果と課題について」に基づき事務局より説明

(3) 安房地区の県立高校の在り方について

① 「普通科及び普通系専門学科・コース」について

【座長】

それでは、まずは、「普通科及び普通系専門学科・コース」について、委員の皆様から御意見を伺いたいと思う。事務局に確認するが、「普通科及び普通系専門学科・コース」というのは具体的には安房高校と長狭高校のことと考えてよろしいか。

《事務局》

よい。

【座長】

ではまず、安房高校及び長狭高校の今後のあり方について、今後生徒により良い学びをできるようにするためにはどうしたらよいかという観点で、その2校について御意見を伺う。

【委員】

では口火を切らせていただく。安房地域の中にあって安房高校は、普通科の高校として、そして県下で10校指定されている進学指導重点校のひとつとして、子どもたちの学びに向き合っていかなければいけないだろう。その中で前回もちょっと話題になったが、この地区から他学区の私立高校に流出をしてしまう現状も我々は認識しなければならない。安房地区の県立高校が残念ながら選ばれていないという状況について、学校は厳しく認識しなければならないだろう。その中で安房の子を安房で育てられる環境づくりに努めなければならない。安房高校では具体的な試みを進めている。例えば、安房地区には大学がなく大学生があまりいないので、大学がどのようなものかはなかなかイメージが湧かない。そこで、国内外問わずいろいろな大学と教育連携を結び、オンライン等も活用しながら大学での学びを、生徒に体感させるような試みをしている。また、安房地区には大手予備校はないが、子どもたちを小さい頃から面倒見ている地元の学習塾がたくさんある。そういったところと連携をして子どもたちの学習の充実に向けていけるとよい。それらを、遠くに行かなくても安房の子は安房でしっかり学ぶことができるというような環境づくりに繋げたい。

【座長】

事務局に確認したいが、今後の安房地区の県立高校の在り方については、この協議会での議論は、具体的にはいつ頃までを視野に入れてのことだと考えたらよろしいか。

《事務局》

本協議会は令和4年から令和13年にかけての10年の県立高校改革を示した「県立高校改革推進プラン」に則って開催していくものであり、基本的にはこのプランの10年間を意識して御発言いただきたい。少子化によって生徒数が減少していく中で、地域としてどう対応していくかというところについて、適正規模についての御意見は次回に御発言いただくこととし、今日は学びに絞っているので、それぞれの学校の学びをどう魅力的にしていき、地域の子どものための教育を担保していくかという視点で御意見をいただけるとありが

たい。

【座長】

今後の10年間を見据えてということで確認をさせていただきたい。また、学級数や学校の規模についての議論は次回ということでよいか。

《事務局》

よい。

【座長】

では今の安房高校についての話があったが、他の委員はどうか。

【委員】

実際に高校を選ぶ中学校の進路指導について、どういう観点で子どもたちが進路先を選択しているのか。実際、この地区の県立学校で定員が満たされているのは安房高校だけであり、あとは定員に達していない状況である。中学校ではどのような対応をしているのか。

【委員】

実情は募集定員に反映されている。やはり大学への進学志向が昔より高くなっており、大学に進学できる学校を選びたいということになる。高校卒業後に就職しようという子どもが減少しており、行けるのであれば安房高校に行ったらどうかという志向が強くなっている。この傾向は、学区外の私立高校に進学する割合の増加にもつながっている。

【委員】

様々な調査の中で、中高生の将来就きたい職業は公務員的なものが多い。小学生はYouTuberが多いが、中高生は公務員や教員などが多く、女子については幼児保育系の希望が高い。そのような傾向も踏まえ、今後の県立高校のことも考えていければよいと思う。

【委員】

中学生で将来就きたい職業が決まっていない生徒については、普通科に進学し3年間の中で具体的な将来について決めていくことが多い。実際には、大学進学だけを考えると普通科だけではなく、職業系専門学科でも指定校推薦があったりする。大学＝普通科だけではない。

【座長】

長狭高校についてはいかがか。

【委員】

長狭高校に学校運営協議会の委員として関わった経験から話させてもらうが、非常に子どもたちの様子が落ち着いていると感じた。ところが実際に進路状況を見てみると、昔に比べて4年制大学に進学する割合が少ない。医療・福祉コースを設置したが、どのような教育をして、その効果についてはどうだったのか。

【座長】

これについては、事務局から説明をお願いしたい。

《事務局》

医療・福祉コースを立ち上げの段階では、亀田病院に御協力をいただいた。子どもたちにとっては医療と言えば医者か看護師か薬剤師ぐらいしか知らないと思うが、実際には言語聴覚士や理学療法士、作業療法士など様々な仕事が医療にあることを気づいてもらうために、1年生全員に対して亀田病院から全ての職の方に来ていただいて説明していただいた。それを聞いて興味関心を持った生徒は2年生から医療コースや福祉コースに分かれて授業を受ける。福祉コースは、地元の社会福祉法人に御協力いただきながら現場での実習などを行い、初任者研修修了者資格を全員に取らせる。医療コースは亀田病院と引き続き連携し、3年生の時には実際に現場スタッフとともに行動する「シャド一体験」などを通し、非常に高いモチベーションを持って卒業していく。卒業後の調査でも、回答があった12名のうち11名が実際に地元で医療の職についてい

る。これは本当に大きな成果である。一方で課題でもあるが、医療・福祉コース以外の進路について周知が足りない。理系で工学部や理学部に行きたいとか、法学部に行きたいというような生徒にももちろん対応するし、チャレンジしてレベルの高い大学に行きたいような生徒たちには、希望を聞いて、教員がマンツーマンに近い形で指導して進路実現に向けてサポートしている。医療・福祉コースが地元で目立ち過ぎて、医療・福祉に行かない子は関係ない学校であるという誤解は避けたい。医療・福祉をひとつの看板にしながら、あらゆる進学への対応をしている学校というように受け取っていただければよい。また、最近では男子バスケットボール部が頑張っており、県総体とウインターカップ予選において県で第2位に入った。南房総でバスケットをやりたい子は目の色が変わったのではないかという気がしている。

【委員】

市内のおよそ3分の1の生徒は長狭高校に例年通っている状況である。ただ、安房地区の東の端にある鴨川市であることから、隣接学区のいすみ、長生地区に進学する生徒もいる。また、他学区の私立高校にバスで通う生徒も多い。このように、鴨川市の中学生の進学先は多種多様である。一番多い時には市内の半分近くの生徒が長狭高校に通っているような年もあったが、子どもたちのニーズも多様化しており、長狭高校への進学者が減少しているのは寂しく感じる。医療・福祉コースのアピールや、大学によってはチャレンジしていくようなところまでできるということについても周知が必要であると感じた。

【委員】

例え話だが、ある高校生が大学を選ぶ際に、ネームバリューがある私立の某大学に入るという目的で受験勉強をし、入学できたことがゴールになってしまい、その後の4年間の大学生活は、勉強がおろそかになり、何とか卒業できた。一方で、別の高校生は、ある大学のある先生に教わりたい、あるいはその研究をしたいという目的で大学に入学し、その教授のもとで4年間勉強し、非常に有意義な4年間を過ごし、社会に役立つような仕事に就いた。非常に極端な例かもしれないが、昔は安房高校と長狭高校、生徒はどちらに行きたいかというよりどちらなら入れるかという観点で選んでいた生徒が多かった。中学校の三者面談の時に、何点だったらどちらかということを経験が指導していた。あるいは、通学費などの観点から、館山市内の生徒で、安房高校が届かなかつたら館山高校という選び方をする生徒もいた。普通科、工業科という選び方ではなく、入れるかどうか。今はどうかというと、各校の特色が色濃く出てきており、安房高校に行けばこう、長狭に行けばこう、そういう特色が出てきたことは非常に良いことだと思う。もっと中学生が目的を持って行けたらよい。

【委員】

安房管内に受験生が800~900人くらいいる中で、併願を含めるとおよそ半分ぐらいの生徒が管内の私立高校を受検している。中学校の先生方と話す、併願校については例えば医療・福祉を希望しているので長狭高校へ、あるいは大学進学を希望しているので安房高校へというような話を伺うことが多い。長狭高校の課題については、医療・福祉しかできないと中学生が思い込んでいるところがあり、進学に特化した学習指導もあるということを対外的に報告し、多様な展開があると周知した方がよい。普通科だけではなく職業系専門学科や総合学科についても、館山総合高校や安房拓心高校など、各校のそれぞれの特色を出していただき、それに負けない私学という形で、この安房地域の中で公私共存していけると良い。

② 「職業系専門学科・コース」について

【座長】

続いて、「職業系専門学科コース」について意見交換をお願いしたい。事務局に伺うが、具体的には、館山総合高校のことでよろしいか。

《事務局》

それでよい。

【 座 長 】

平成 20 年度に館山高校と安房水産高校が統合して館山総合高校となり、現在は工業、商業、海洋、家庭と、四つの専門学科がある。

【 委 員 】

館山高校と安房水産高校を引き継いだ館山総合高校の在り方について考える際に大きいのは、「地域とともに」という考え方である。文部科学省のスーパープロフェッショナルハイスクール事業に指定され、地域の中で何ができるのかという視点で専門性を高める取組を行ってきた。例えば館山駅前の開発に高校生として何ができるのか、あるいは地元の食材を生かした食品開発や、海の環境について海洋科に何ができるかなど。これらのことは高校生だけではできないことも多く、地域の方々の御支援をいただきながら、非常に活発な教育活動を展開してきた。また、館山総合高校には、全国でも十数隻しかないという大型実習船を保有しており、そのような大切な教育財産をいかに活用し、子どもたちに還元していけるかということも今後非常に大きなことになってくる。

《 事務局 》

海洋科について補足させていただく。千葉県では普通科志向が非常に強く、安房地域だけでなく全県的に専門学科が苦戦している。4つの専門学科を有する館山統合高校においても同様であり、定員の五〜七割ほどしか充足していない現状がある。特色ある海洋科においても同様である。以前は水産単独校が県内に3校あったが、現在は海洋科としては銚子と館山の2カ所にしかない。館山の特徴は船乗りの育成であり、引き続き専攻科でさらに2年間学ぶことで3級海技士という、外国船の船長にもなれる資格が取れるのが大きな特徴である。ところが専攻科でさえも、なかなか生徒が集まらないという状況であり、生徒には魅力ある学びをぜひ体験し、卒業していつてもらいたいところだが、なかなか現状そうはなっていない。委員の皆様には、そのような視点を踏まえ、子どもたちが夢を持って館山総合にきてもらうためには、どのような努力が県教委や高校に必要なのか、また地域として、どのような御支援がいただけるのかという観点で、ぜひ御意見いただきたい。

【 座 長 】

ではいかがか。

【 委 員 】

県立学校の校長先生方から各学校の取組や課題について伺う機会がある。その中で非常に興味深かった点について話をさせていただく。高校側は外部への情報発信や地域連携など様々な取組を行っており、特に実業系の学校は頑張っている。館山総合も安房拓心も、木更津方面であれば木更津東高校の家政科なども、様々な努力をしている。本当に様々なイベントを市町村行政や近隣の小中学校と連携して行っており、そのイベントだけを切りとれば、非常に評価も高い。地域も喜んでいて、関わった小学生中学生も目を輝かせながら参加をしている。それに対して高校生も非常にしっかりとした手ごたえを得ている。しかし、これが志願者増加には繋がらないという現実がある。関わった小中学生の多くが、結局普通科を選んでしまう。高校、特に実業系の学校の努力と志願者数の増加が結びつかない根本には、産業構造がある。館山総合に行ったらその先に何があるのか。安房拓心に行ったらその先に何があるのか。卒業後に地元で雇用がしっかりあるのか。あるいは、高校で様々な地域と連携した活動をし、そのまま地元で就職をするのか。もし大学に行きたかったらいけるのか。大学に進学し4年後に地元に戻ってくる保証、つまり地元の受入環境があるのか。そういうところまでを見据えて環境整備していかないと解決には繋がらない。中学の進路指導から始まり、絞り切れないから普通科に進み、普通科在学中にも絞り切れないから4年制大学に進み、どうしようどうしようと言っているうちに、都会の方で就職をして帰ってこなくなり、地元の産業も衰退してしまう、という悪循環が発生しているのではないか。今現在も実業系の学校を中心に、普通科の各種コースも含めて、地元へ発信しながら本当に頑張っており、地域も連携をしながら今後も支え続けていくわけだが、その先の受け入れを

どうしていくかということは、地元行政の分野でもかなり掘り下げて、深く考えていかなければならない状況であると感じる。

【委員】

保護者の立場からの意見であるが、自分の娘が学区外の私立高校への進学が決まった。高校選びの際には、子どもたちへの学びの周知もちろん大事だが、親へのアピールも大切である。体験入学に親子一緒に参加するケースも多い。今回進学を決めた高校の説明会に参加させていただき、親子ともどもインスピレーションを感じて進学を決定した。子どもが一番に行きたいところに行かせるというのが親の務めであるが、保護者の意見というのも大事であると、改めて強く感じた。高校の体験入学にできるだけ保護者も一緒に参加し、親も一緒に学校の雰囲気味わうと、違った方向性が見えてくる。また、娘が通う塾で伺った話だが、ここ数年、時代は私立であるという考えの保護者が多くなっているそうだ。そのあたりもやはりどこかで力を入れて考えなければならぬと感じたところだ。

【委員】

職業系の専門学校について、現役の高校生たちが小学校に行って小学生のキャリア教育支援を行い、実際に何ができるのかを示しながら一緒に活動していく中で、将来こんなことができるようになり、こんな職業につけるのだというようなことを小さいうちに示してあげることも大切なのかなという気がする。やはり、ひとつの資格を取るということは大きな特技である。小学校の生活科や総合的な学習の時間などを協力しつつ、そのあたりのアピールもできれば理想だと感じた。中学校のキャリア教育支援でも問題ないだろうが、学年が上がるにつれ、その先の進路のことがちらついてしまう。

《事務局》

保護者の意見は大変貴重であり、県教委としてもやはり保護者への魅力発信も重要であると考えている。参考として質問させていただきたい。先ほどの委員の発言の中で、見学に行った私立高校に親子でインスピレーションを感じたとあったが、どんなところがよかったのか、ぜひ教えていただきたい。

【委員】

志望校を決めるまでにいろいろな高校の説明会に伺った。どの高校でも挨拶はあったが、入学を決めた私立高校では生徒も先生も皆挨拶をする際にしっかり立ち止まっており、挨拶が終わるまではその場から離れなかった。要は、「ながら挨拶」をしないということを徹底されていた。娘は英語が好きだったので、英語教育に力を入れており、英検資格所持で特待生受検ができるということも魅力ではあったが、勉強面だけでなく挨拶を通して人間としての在り方をしっかり教育されている所が決め手となった。

《事務局》

逆に、また、県立高校にも体験に行かれたと思うが、県立に足りなかった部分や、ここがこうだったら少しは考えたとか、そのような意見があれば伺いたい。

【委員】

足りないとははなく、他にもいろいろと行かせていただいた中で、どの高校でも生徒も先生もみんな良い雰囲気を感じることができた。

【委員】

保護者の立場として、自分自身も高校は他学区の私立に進学しているが、自分はバスケットボールをしていたので、バスケをするのであれば学区内に留まらずに上に出るという考えがあった。今は長狭高校に良い指導者がいるので、有力な生徒が集まって強いチームになっているが、当時は地元の高校に入ったら上りのチームには勝てないというのが現状であった。また、スポーツ推薦などで有力な生徒が集まる私立高校ではチーム内での競い合いがあり、それによって切磋琢磨して向上することができる。もちろん地元に残るから駄目ということではないが、保護者という立場になったときに、学校の評判はやはり気になってしまう。あまり素行の良くない生徒が居たりするよりは、先生が多く目が行き届いている私立高校に行ったほうが良い

いという考え方もある。学力が優れているのであれば、安房高校や長狭高校に行って医療や福祉の方に行くという考えもあるが、実際、勉強が苦手な子どもや情緒不安定な子どもが、地元でどこの学校に進学したら、本当に適正に高校生活を行えるのか、そういったことを考えると上り方面の地域連携アクティブスクールに行かせた方が良い。何かを特化してと考えれば、専門学科であれば館山総合高校であるが、特に何もなければ私立高校に行くという考えも多いのかもしれない。

③ 「総合学科」について

【座長】

次は「総合学科」についての意見交換だが、具体的には安房拓心高校についてのことと理解していただきたい。安房拓心高校は安房農業高校が前身であり、生産技術科、農業工学科、農業経済科、食品調理科と4つの学科を有していた。平成16年度に校名を安房拓心に変更し、翌年の平成17年に総合学科が新設された。総合学科という学科自体について、少々分かりづらいところがあるだろうから、事務局に改めて説明をしていただきたいがよろしいか。

《事務局》

高等学校の学科には、普通科、理数科などの普通系専門学科、工業、農業、商業などの職業系専門学科があるというのが以前の状況であった。ところが、普通科に行く生徒が増加するにつれて、半数以上が就職するというような学校も増加し、そのような学校を卒業して就職するにあたって、例えば簿記だとかビジネス関係のような専門的な学びを通してしっかりと社会人となって生きていけるスキルを身につけさせようというところから総合学科が始まった。総合学科では、1年生は全員共通科目を履修する。これは普通高校の方と一緒にいる。ただし、総合学科では「産業社会と人間」という教科を必ず履修させる。そこではキャリア教育と職業教育を通して将来について考えようというガイダンス的な授業である。そのうえで、2年生になったら、専門的な学びを履修する「系列」に分かれる。例えば安房拓心高校では、2年生以降、英数国を含めた文系理系の科目を学ぶ「文理系列」、農業について学ぶ「園芸系列」、酪農発祥の地である南房総ならではの「畜産系列」、測量などの技術を学ぶ「農業土木系列」、もうひとつはかなりの特色であるが「調理系列」。実は安房拓心高校の調理系列で学ぶと、高校卒業の時点で調理師の資格が取れる。千葉県内の県立高校において高卒で調理師の資格を取れる学校は安房拓心高校と佐倉東高校の2校しかなく、先ほど話題に上がった海洋科と同様、非常に貴重な学びである。総合学科は普通科、職業系専門学科に次ぐ第3の学科として設置された、普通科と専門学科の中間的な学科であり、入学時点で専門を選ばなくてもよいという学科である。千葉県には全日制の総合学科が6校ある。都市部では、進学に特化できるような総合学科として幕張総合や小金があり、郡部では職業系の科目中心の総合学科として、八街高校、大原高校、安房拓心高校、君津青葉高校の4校がある。

【座長】

それでは意見交換の時間だが、例えば、総合学科そのものに対する疑問、質問でも結構である。ざっくりばらんにお話いただきたいかがか。

【委員】

私は酪農をやっており、安房拓心高校からすぐ近くにあるということで、安房拓心高校の良い点についてお話ししたい。安房拓心高校の園芸系列の生徒は、近所の嶺南小学校に出向いて小学生に大根の作り方や花の苗の植え方を教えている。大根を植えたら大根の収穫まで行き、花の苗を植えたら花と一緒に育てていくということを、園芸系列の生徒が行っている。畜産系列に関しては、安房拓心高校で作ったヨーグルトを嶺南小学校に持って行き、給食のときに一緒に食べる。そうすることで、小学生は必然的にお兄さんお姉さんに憧れを持って、私も安房拓心高校に入りたいなという夢を持つ子もいるようだ。また、うちでは畜産コースの生徒の夏休み中の実習の受け入れを行っている。仮に非農家出身の生徒であっても、実際に体験するこ

とで、将来酪農家になりたいとか、酪農に関する職業に就きたいという夢を持つ子がいて、実際にその道を選んでくれている子もいる。安房拓心高校の魅力は地域との関わり方である。地元の人が生徒に教える。生徒は小学生に教える。そのような特色があるのは一番良いところである。酪農家自体は年々減少している。先ほど事務局からあったが、南房総市は酪農の発祥地でもある。地元特有の産業を残していくためにも、こういった特色のある高校を何とか残していきたいと思うところである。

【委員】

南房総市においては、安房拓心高校の存在が非常に大きいものがある。小中学校との交流が非常に頻繁に行われており、それぞれの系列で頑張っって特色を打ち出している。牛の全国大会でも賞に入ったり、安房拓心高校で育てているシクラメンが南房総市のふるさと納税の返礼品にもなったりしており、非常に行政ともマッチして、強味を發揮していると思う。安房拓心高校は中学生にも人気がある。ただ、非常に申し上げにくい、和式のトイレが多いのが難点である。洋式のトイレ、暖かい便座のある私立高校に比べると、県立高校は女子トイレ、男子トイレともに和式のトイレが多く、中学生やその保護者は学校見学の際に公立と私立の差を感じているようだ。

【座長】

設備のことは、次回協議会でも議題にしていく。

《事務局》

実際、それも私立学校の魅力のひとつであり、それは私学に水をあけられている部分である。

【委員】

館山市で移住のお手伝いをしている。皆さんのお話を伺いながら、娘さんが域外に進路を決定され、あるいは御自身が域外の私立高校の御出身であるという話も伺い、実は自分も域外の私立高校に通っていたので、一言だけ意見を申し上げたい。私どもの法人が行っているのは、館山に移住をしたいという方への支援活動であり、いわゆる大きなマーケットに受けるような形というよりは、田舎暮らしをしたい、館山みたいな所に住みたいという方を対象に、小さな需要を狙っていくということをしている。そういう意味では、この安房地域の高校で今後生徒を集めるときには、大都市圏の東京都や千葉の県北にあるような高校と違って、おそらく小さな特色のあるマーケット、小さなニーズを拾っていくことも大事であると思っている。そういう意味では、安房地域の各高校の特色は興味深い。実は私も今は調理師をしているが、例えば調理師免許を取れるというの大きな特色だと思う。移住者の人たちのお子さんの進路を考えるときに、決して高い学歴を求めるような志向の人が多いわけではない。これからこの地域が活路を生み出していくひとつの方策として移住してくる人達を増やすということを考えたときに、各高校の持つ特色・魅力あるコース等が周知されていないために生徒が集まらないという話は大変もったいないと感じる。各コースのネーミングが非常にわかりづらいのではないのか。工業科や商業科、海洋科、家政科など、専門学科についても同様である。家政科などは名前だけではイメージが湧かない。安房拓心高校の総合学科についても、先ほどの説明を伺って初めて知ったという状況であるが、移住者の中には農業をやりたいという人も多く、安房拓心高校のような学校はとても魅力的である。農業の道へ子ども達を導いてくれるような進路がある高校が、ここ安房の地にあるというのはとても大きなことである。だからネーミングひとつでイメージを持ってもらうことは大切である。海洋科についても、海洋の科学的なことを学ぶのか海洋ビジネスの学科なのかちょっとわかりづらい。先ほどの事務局の説明では「船乗りを育成する」という非常にピンポイントの話であった。であるならば、例えば、「船乗り育成科」のようにわかりやすい名前の方が実はマーケティングに使いやすいのではないかと感じている。地域の子どもたちをマーケットにする時には、ピンポイントに小さなマーケットを拾っていくことで、実は将来的な志願者数の増加に繋がるのではないかという気がしている。

④ 「社会のニーズに対応した教育」について

【 座 長 】

続いてのテーマは、「社会のニーズに対応した教育」である。これは具体的には、長狭高校と館山総合高校の定時制課程、及び館山総合高校にある通信制協力校、この3つについてである。通信制協力校については、事務局から改めて説明していただけるか。

《 事務局 》

全日制課程では3年かけて卒業するところを夜間定時制課程では4年かけて卒業する。しかし最近では、昼間仕事しながら定時制に通う、いわゆる勤労学生はほとんどいなくなっている。それよりも、不登校や家庭の都合等さまざまな事情により全日制に通いづらい状況の生徒が多く入学している現状がある。そのため、0時間目の活用や通信制課程の併修などにより3年間で卒業できるような工夫も高校は行っている。また、千葉市の生浜高校、松戸市の松戸南高校、佐倉市の佐倉南高校は午前部・午後部・夜間部からなる三部制定時制高校であり、これらの学校では他部履修という制度、例えば午後部の生徒が午前部あるいは夜間部の授業をプラスアルファで履修することにより、3年間で卒業も可能である。館山高校と長狭高校については夜間定時制の課程である。また、通信制については、千葉県内には通信制の県立高校は千葉市の千葉大宮高校1校だけである。通信制課程では、大半がレポート等による指導であるが、前期と後期でそれぞれ10回程度は本校舎での通学指導（スクーリング）を行う必要がある。館山の子どもが千葉大宮の通信制を卒業するためには、毎年20回程度スクーリングのために千葉市に行かなければならず、これは現実的に厳しい話である。そのような流れから、通信制協力校を作り、本校には最小限必要な年間行事、例えば、入学式とか卒業式など、本当に一部だけ通えばよく、大部分は地元でスクーリングができるよう体制を整えた。館山総合高校では、海洋校舎に通信制専用の教室を設け、千葉大宮のスクーリングを年間10日から20日間ほど行っている。平成29年度より始まった制度で、既に卒業生が3回出ており、中には卒業後に公務員になった生徒もいる。

【 座 長 】

それでは意見交換に移らせていただく。

【 委 員 】

館山総合高校の定時制で3年間教頭として勤務していたことがあり、通信制協力校にも多少関わらせていただいた。必ずしも今それを利用している生徒数は多くはないものの、いずれも公教育として本当になくしてはならないものであると感じている。当時は、小中学校時代に不登校を経験した生徒が多く、中には二十歳近くになってようやく自宅から一歩外に出られるようになったということで改めて高校に入学したという生徒もいた。そのような中で私が未だに忘れられないのが、ある日の休み時間に生徒が二人ほど話を聞いてくださいと職員室に入ってきた。聞けば期末試験の範囲がもう終わったからということで、残りの時間が自習になってしまった教科があるという。その授業担当は生徒が試験勉強できるよう、よかれと思ってそうしていたことだが、その生徒にとっては、学校に来ているのは自習をするためでも試験で良い点を取るためでもなく、学びたいからであるということであった。私は大変衝撃を受け、すぐに先生方を集めて、その生徒の言葉を伝えた。これは定時制の子どもだけではなく全ての子どもにいえることであり、いわば学校教育の原点のようなものであると思う。

【 座 長 】

館山総合高校の定時制の実情を伺うことができた。長狭高校についてどなたか話を伺いたいが、事務局からはどうか。

《 事務局 》

長狭高校の定時制課程も、様々な事情を抱えた子どもたちが集まってくる。人数は全学年合わせても10名程度という小規模ではあるが、その子たちはそこまでの過程の中で様々な問題を抱えながら、その子たちなりに本当に苦労してきている。それが定時制に入って、先生方から手厚い指導を受ける中で、社会に出るに

あたって必要な様々な学びや、訓練とまではいかないが、対話をしながら卒業していく。こういう表現が正しいかどうか分からないが、学びのセーフティネットという役割を、定時制高校、そして通信制高校は担っている。

【 座 長 】

決して生徒数だけで考えてはならないということか。他にはいかがか。

【 委 員 】

これまでに定時制高校の卒業式に4回招待された経験がある。私が校長をしていた小学校の生徒が、長狭高校の定時制で卒業式を迎えた。二人いたが、一人は小学校時代に不登校であり、もう一人は親のネグレクトであった。そのような事情を抱えた子どもたちが高等学校を卒業する日を迎えたことは非常に感動的であり、感慨深く思った次第だ。また、学年の区分がなく進路に合わせて履修科目を選択できるという意味で、今は定時制高校や通信制高校のような単位制高校が、不登校の子どもや発達障害を抱えた子どもたちには必要になってくると思う。

【 委 員 】

定時制に通っている子どもたちは、私見ではあるが、そこに通えているからまだいいのかもしれない。定時制等にも通えず、家に籠もっている子どもが、実は世の中にはたくさんいて、先日の新聞報道では小中学校で不登校が20万人を超えた、という話もあり、また別の報道では通信制の生徒数が24万人という、その中にはもちろん不登校ではない子もいるだろうが、増えているとのことである。全国の高校生の7%が通信制に通っているというところで、通信制の必要性について感じるころである。学校に通えない子どもたちをどのようにして通えるようにするか、または受け入れられる場所をどう増やしていくかが大切である。今安房地区においても約100人の子どもたちが学校に通えず、違うところで学ぶなどしているという報告が上がっている。それらの子どもたちが数年後そのままスライドして高校段階まで上がってきたときに、高校等に通えるようになっていなければならないのであれば良いのだが、通えていないのであれば対応が必要である。18歳を超えた後にどのようにして地域と関わっていけるかということも大事なところになってくる。そういった子どもたちが将来自立した社会人となれるよう、学校と地域が一体となってしっかり導いてあげなければならない。

【 委 員 】

鴨川市教育委員会では、適応指導教室に不登校の子どもたちが通っている。そこで指導する先生方から、中学時代に不登校で適応指導教室に通学していた子どもが定時制や千葉大宮の通信制に進学し、無事に高校を卒業できたという報告をここ数年受けるようになったという話を聞いた。定時制や通信制協力校が安房地区に存在する意義はたいへん大きい。子どもの数は少なくとも、教育の機会を確保する法律等もあり、そういう意味で、この両校の今後の存続には大きな教育的意義がある。

【 委 員 】

鴨川市民という視点でお話させていただく。基礎資料の5ページの「定時制の概要」を御覧いただきたい。長狭高校と館山総合高校の定時制の生徒数がそれぞれ11名と16名であるが、長狭高校の居住市町別の割合を見ると鴨川市在住の生徒が100%である。夜間定時制ということ考えた時に、館山市から鴨川方面の最終電車というのが9時18分館山発であり、鴨川市在住の生徒が館山総合の定時制で学ぶという選択肢が基本的にはない。仮に長狭高校の定時制がなかった場合には、子どもたちが定時制で学ぶという選択肢がなくなってしまうというのが、安房地区の交通機関の整備状況の現状である。少し先走った話になるが、学校再編を考えていく中で、生徒数の推移や地域のニーズは当然重要な要素になるかとは思いますが、そこで学ぶ子たちの通学状況が実際にどうなるかということも加味した中で、学びのセーフティネットという部分を公教育の立場でやはり維持し続けていかななくてはならないと感じる。定時制を必要としている子どもが今後も一定数存在し続けるという予測のもとで検討していかなければならない。

【 座 長 】

アクセスの問題については、電車の本数が増えるとよいが、そこはJRの問題であろう。

【委員】

不登校について、各高校には入学後に中途退学してしまった生徒がいると思うが、やはり希望を持って入った高校であればしっかり卒業させてあげたいというのが保護者の思いである。もし在学中に不登校になるような原因があるのであれば、そのあたりを追求していかなければならないと感じた。

【座長】

中途退学の状況ということだが、事務局から説明いただいてもよろしいか。

《事務局》

高校にも、学校に来られなくなってしまう生徒は一定数おり、以前はそのまま退学していたケースも多かったが、最近ではきめ細かく対応しながら、何とか最後まで面倒を見て、できるだけ進級させて卒業まで持っていこうという方向性になってきている。そのため、中退率自体は下がっている状況である。また、全日制高校に毎日通えなかったとしても、中退せずに通信制高校に転学するなどして学びを継続する方法もあり、できるだけ社会から孤立させないようにという観点で対応している状況である。

【座長】

他にはいかがか。

【委員】

先ほど公共交通の関係で、主に電車の話があったが、バスの関係で発言させていただく。鴨川市では現在、基本的に全ての路線バスが国、県、あるいは市の補助によって維持されている。バスの利用者自体が非常に減少している中で、行政の負担も非常に大きくなっており、そういう面では維持存続が非常に難しくなっている。バス事業者の側でも乗務員不足が深刻な状況になっている。乗務員が高齢化し、60代あるいは50代の乗務員の割合が非常に高くなっており、今後、続々と退職していくことが見込まれる。また、働き方改革により、来年の4月からは自動車運転者の拘束時間を短くしていかざるを得なくなる。主に宅配事業者の件が新聞報道等でクローズアップされているが、実はバスもそれに該当する。持続可能な公共交通をどうしていくかということについてバス事業者と話し合う中で、実際に一般のバス路線の減便を検討している状況である。このため、生徒が高校に通学する交通手段についても、生徒自前での通学手段も含めて、もう少し柔軟にならないかを感じている。

【委員】

安房地区の子どもにとっては、選択肢が多くバリエーションに富んだ学校の中から選ぶことができる。そして、各学校では、定時制、通信制協力校も含め、特色のある展開をしている。この環境は、移住をしてきた方にも大変魅力的である。一方で、子どもの数自体は減少しており、さらにはその中で木更津のほうに流出していくことも事実である。非常にもったいないと感じた。魅力あふれる安房地区の県立4校+安房西高校さんには、地元の子どもはもちろんのこと、逆に木更津・君津方面の中学生からも選ばれる学校に是非なっていたきたい。競う環境を選ぶ子にも、挨拶や礼儀を大切にする子にも選ばれるような学校になっただきたい。

⑤ 全体を通して

【座長】

それでは最後に、全体を通して何か意見があれば伺いたい。感想でも、事務局への質問でも、自身の発言に対する補足説明でも構わない。

【委員】

鴨川市の状況を説明させていただきたい。鴨川市では、医療福祉と観光が主要産業となっており、それぞれの業種に従事されている方を合計すると市全体の3割を超えている。そういった特徴的な地域構造にあっ

て、これまではそうした産業に人材を送り込む教育機関が存在していた。医療で言えば、亀田医療大学があり、亀田医療技術専門学校があり、そして長狭高校では医療・福祉コースを設置している。一方、観光では、城西国際大学観光学部が立地していたものの、残念ながら昨年4月をもって東金に移転してしまった。つまり、城西国際大学から地域の観光産業等の人材を供給していくという流れを十分に作ることはできなかったという状況である。実際に地域の産業のニーズ、例えば求人などを見ても、地域社会のニーズと、高校、大学あるいは専門学校で提供している教育サービスがミスマッチを起こしている状況なのではないだろうか。地域の産業を支えていく、地域の特色をこれからも維持していく、そういう観点では、いろいろな機能があったほうがいいが、それではどうしても規模は小さくなっていく。様々な特色をそろえる方向とするならば、特に君津方面へ学生が流出している状況を考えると、少々突飛な話かもしれないが、国際バカロレア（IB）認定校を目指してみるなども考えたらいかがだろうか。今、全国各地でインターナショナルスクールの設置が進んでおり、そうした学校に日本人も通わせていくという流れが出てきている。

【 座 長 】

他になければ次に進む。

議事の「(2) その他」に移るが、何か議題があるか

(意見なし)

ないようなので、進行を事務局にお返しする。

第3回安房地区地域協議会 記録

- 1 日 時 令和5年3月15日(水) 午後2時から4時まで
- 2 場 所 千葉県南総文化ホール 大会議室
- 3 出席者 15名/16名
- 4 概 要

(1) 第2回安房地区地域協議会の記録(案)について

委員に確認し、承認

(2) 安房地区の県立高校の適正規模・適正配置について

① 望ましい学校規模について

【座長】

事務局から説明があったように、中学校卒業生数の減少見込みや、安房地区の4校の入試の志願状況を見ると、非常に厳しい状況である。1学級40名という国の標準法の枠組の中で考えた際に、現在の学校規模が適切であるか否か、また、子どもたちにとって望ましい環境として、高等学校の最低限の規模とはどれくらいか、そのようなことも含め御意見をいただきたいが、いかがか。

【委員】

質問だが、例えばの話、複数の学科をまとめてコース制に転換するなどした場合、教員の数はどうなるか。

《事務局》

現状では、国の標準法のもとで、40人1学級とした際の設置学級数に応じて教員を配置している。したがって、学級数が減少するとそれに伴い教員の数が減ることになる。また、専門学科の設置に伴う加配措置があるが、学科からコースに転換すると、専門学科加配がなくなってしまう。

【委員】

子どもの数が減少しているという現実の中で、例えば安房地区から家政科がなくなったと仮定した場合、家政科の学びを希望する子どもは木更津や千葉方面まで通わなければならなくなる。工業や商業の学びも同様であり、小中学生を預かる立場としては、この地域の多様な学びの選択肢は残してあげたい。そうなる分量よりも質を求めるような教育課程の工夫が必要であるが、数の上で考えなければならないのか。小学校が段階的に35人学級に移行し、中学校でも少人数指導による丁寧な指導の手立てが出てきている中で、県立高校については、少人数についての見通しは持っていないのか。

《事務局》

この地区の4校の学びをどう残していくかという流れの中で、できる限りは今の状況を続けられればベストであるが、子どもが減っていく現状の中、今後厳しい状況も想定され、そのときには学びを残しながら集約していくということも検討しなければならない。この会議でそれぞれの立場から意見をいただき、この地域の子どものように学びを担保していけるのか、皆様から知恵をお借りしたい。

【委員】

悩ましい問題である。現状の4校の募集定員のままでは立ち行かなくなってくるのだが、それが簡単に定員を減らすという結論には結びつけられない。定員減=教員定数減に繋がってしまう。教員の数が減ると、例えば地理専門の社会科教員が日本史を担当したり、生物専門の理科科教員が物理を担当したりするなど、専門外の科目を指導しなければならない状況が生じる恐れがある。あるいは一人で複数科目を担当しなければならないこともあり得る。それが専門学科であればなおさらだ。1学級40名という標準法の枠組で考えるとどうしてもそういう結論になる。これが例えば1学級35名ということになれば、現状4校18学級で合計90人分減らせることになり、6~7年後の子どもの数に合致する。ハードルが高いのは承知であるが、この枠組の前提が変わってくれば話は変わる。

【委員】

定数に踏み込んでいかないといけない。全国的に見れば都市部よりも郡部で課題があるため、定員の考え方についてその境目に線引きできると良い。例えば地域連携協働校についても教員定数について配慮が出せるのかどうかも今後検討の余地がある。安房地区の定員設定については、現状でも中学校卒業生数が846名に対して、全日制18学級＋定時制2学級合計して800名というところに無理がある。特に実業系の学科が苦戦している中で、安房高校6学級＋長狭高校4学級の普通科10学級募集というところをどう考えるか。仮に安房高校が4クラス募集になれば志願者が他学科に流れるのではないかと。安房高校や長狭高校に手が届くから普通科志向が強まり二極化してしまっている。地域としてこれらの実業系学科をどう考えるか。安房拓心高校と館山総合高校それぞれが独自性のある取組を頑張っているのだが、この2校の被り感を極力なくし、両校の方向性をより明確にして、はっきりとした棲み分けをしていく必要があるのではないかと感じた。

【委員】

1学級40名という国の標準法を単純に当てはめると10年後には10学級分になってしまうという説明が冒頭で事務局からあった。単純計算するとそうなってしまうところだが、そうならない道を、ということでも意見をいただきたいところだが、いかがか。また、国の方で高校も少人数をとという動きはでてくるのかどうか。

《事務局》

国の標準法が変わればそれに応じて職員配置も変わってくるところだが、現状小学校で段階的に始まったばかりであり、仮に高校も、となったとしてもかなり先の話になると予想できる。また、発達段階に応じた理想の学級規模というのがあり、高校でも35人が理想かどうかは議論の余地があるところである。また、異次元の子育て対策という流れであるところではあるが、全ての高校で35人学級にすることは相当な額の予算措置を行うということであり、国として財政的にどこまで対応するのかを考えると、なかなか難しいのではないかと推察される。

【委員】

資料1において5歳までの人数が出ているが、出生数が加速的に減少している。40人定員のまま続けばますます厳しい状況が続く、議論が進まないところである。ただ、これだけ定員割れているにも関わらず、4校の学びのバランスを考えて残していただいているということもある。今後は、県内遠隔地や他県からの留学生の呼び込みなどにも努力し、他地域から子どもを呼べる状況を作っていくしかない。40人にこだわらず、少人数の教育に魅力を感じて他県に子どもを送っている親も全国にということを評価していただき、過疎地域でありこれ以上人数を増やすことが簡単ではないことから、この地域についても国の基準をあてはめずに特例を認めるようなことも検討してほしい。

【委員】

3市1町の首長と教育長も、少子化と木更津方面への流出に対して危機感を感じている。令和4年9月26日に県教育委員会に対して「安房地域の県立高等学校に関する要望書」を出しており、その中で「中学校卒業生数の減少に合わせた学校統廃合ではなく、安房地域の持続的な発展を重要視した県立高等学校の在り方を考えること。高校標準法にとらわれず、40人学級を前提としない学級数について、地理的状況等も踏まえて検討すること。」と要望している状況がある。

② 地域との連携及び地域からの支援について

【座長】

現在でもこの地区においては、県立高校と市町が連携した様々な取組が進められているところだが、皆様には、今後さらにどのような連携や支援が考えられるか、御意見を伺いたい。

【委員】

今後ますます子どもたちの興味・関心に応じた、学びの多様化に対応した教育を提供していく必要がある。

不登校も増えている中で、学年の区分がない単位制を検討していくべきである。現在この地区では安房高校と安房拓心高校に単位制を導入しているが、地域との連携の中で、例えば地域から指導者を入れるなど、おそらく農業科や園芸科などではすでに行われているかもしれないが、そのようなことを進めていく中で、多様な学びを深めていく方向性を地域との連携の中で考えていくことも必要なのではないか。

【座長】

前回の会議において、この地区の県立高校と市町が連携した様々な取組事例が紹介されたが、他にも同様の取組があれば参考にしたい。事務局からいかがか。

《事務局》

地域連携ということでは、やはり専門学科による専門的な学びが活躍している。館山総合高校の商業科、家政科、工業科が連携し、パッケージも含めた弁当の開発を行い、それを地域へ提案して販売してもらっている。また、駅前観光案内所を、観光客にとってよりわかりやすいように高校生の感覚で改善する提案をしたり、地域のお店でのメニュー開発提案を行ったりしている。残念ながらそれが生徒募集になかなか結び付いていないが、地域貢献ということでは、かなり頑張っている。安房拓心高校については、地元の中学校や小学校に高校生が足を運んで支援することで、「憧れのお兄さんお姉さん」というイメージを与えている。両校ともそういった形で頑張っている。

また、長狭高校は医療福祉コース入れたことにより、地元の医療機関との連携が根付いている。卒業後に地元の医療機関で勤務しているケースもかなり多く、そういう意味では連携のサイクルがすでに回っている。

【座長】

学校の魅力を高めて、できれば生徒募集に繋がってほしいところである。今日は「適正規模・適正配置」という大きなメインテーマがあり、地域との連携及び地域からの支援が適正規模や適正配置に資するようなアイデアがあるとよい。ついては、例えば他県での取組の事例があれば教えていただきたいが、いかがか。

《事務局》

千葉県はまだまだ人口が多いが、地方では少子化が深刻であり、北海道などでは半数近くの高校で1学年1学級の募集である。それくらい子どもがいない。しかも面積が広大なため、隣の学校からも相当な距離がある状況の中で、県立を市立や町立に移管して存続していく選択をした市町村もある。また、県立のままでも、市町村が寮を用意して受け入れ体制を整える例も多い。寮にはインシヤルコストもランニングコストもかかるため、下宿という手法が最近では使われている。他県や遠隔地から移り住んで下宿してくれた生徒に対して、市町村で月額1万5000円から3万円ほどの家賃補助をしている例もある。

NHKでも特集されたが、愛媛県大洲市にある長浜高校では、水族館部という特色を特化してPRし、全国から来てくれた生徒には下宿を斡旋し、支度金として20万の補助や、エアコンも含めた電化製品を市で用意している。1学年あたり30人ほどであった生徒数が現在では倍増して60人ほどである。千葉県の女の子が母親とともに移住して通学している例もあるようだ。

また、先日あるコンペティションで大原高校の生徒が提案した企画が全国百選に選ばれた。過疎化が進む地域にある空き家を提供することで、遠隔地から生徒を呼び込もうという企画であった。我々も何とか受け入れ体制を今後検討していく必要があると認識しており、市町にもいろいろ相談させていただいているところである。

【座長】

館山総合の海洋科については、そのようなアイデアもあり得るということだろう。

【委員】

館山総合の海洋科に絞って話をさせていただく。基礎資料の中にあっただが、専攻科在籍生徒の居住市町村が埼玉や船橋、成田、君津など遠方であった。今年度の専攻科受検者の中にも安房管外から数名来ていると伺った。ただ、海洋科については、専門学科であるため受検自体は可能だが、実際に高校生が遠方から通学するのは不可能であり、それを受け入れるには行政の協力が必要である。県と市町でぜひ話し合ってもらいたい。

学びの魅力があるから子どもが集まってくる。館山総合には千潮丸があり、県北の子どもでも船乗りになりたいというニーズがあれば安房地区で受け入れる体制を行政で整えるべきである。

【委員】

移住のお手伝いをしている立場から、ひと言伝えたい。遠隔地からの生徒を集めるということで、空き家の活用や、下宿のような事例もあるという話もあったが、実際に安房地区は千葉県内の中でも移住先としてはかなり人気のある場所である。一方で、館山市では3000軒を超える空き家があり、地域の大きな問題のひとつになっている。生徒が集まらず、高校が今後学級減や統合のような問題に直面しているのは、地域の問題であり、そもそも正すと実は地域の問題が学校に反映されてしまってきているというような現状である。

今私たちが取り組んでいる事例として、小学校の話であるが、館山市のとある小さな小学校のPTAの人たちが、地域に何とか部屋を見つけて移住者に提供するという活動を始めたところ、11月からその活動を始め、3件の空き家に子どもたちを連れて移住してくる人たちが決まった。他にも現在対応中であるが、小学生2人いる家族が北海道から移住を希望している。そういう意味では地域との連携は切っても切り離せないところである。

また、過去にPTA会長をしたときに強く感じたのが、教職員の負担がとて大きいということである。例えば、長狭高校のバスケットボール部の活躍と今年度の募集状況を見ると、部活動も無視できないところであるが、顧問の負担がたいへん大きいため、地域人材を指導者として活用するなどし、持続可能な形を作ることは可能なのではないかと思う。地域住民にとって県立高校というのは敷居が高く、立ち入りづらい雰囲気があるが、地元市町村にある学校であるので、我々市民がもっと関わられるような形があってもよい。地域ともう少し密着をして、地域と学校がもっと一緒に取り組んだり、地域の人材を登用したり、ボランティアなど予算をかけずともできることは結構あると感じている。この地域は間違いなく魅力があり、子育て世代は確実に来る。我々も頑張って住民を増やす努力をするので、ぜひ協力してほしい。

【委員】

鋸南町は人口が7000人を切ってしまった。子供も出生数が年間10人を切ってしまう可能性がある状況である。どうすれば少しでも維持できるかということについて、地域の方と小中学生が話し合う機会を2年連続で設けている。その中で出た意見として、地域とのつながりを高校の教育課程に組み込んでほしいというものがあった。実践している取組はあるだろうが、それが点になっていると思われるので、それをつないで線にしていきたい。この地域の子どもたちは6割～7割が外に出て行ってしまう。地域の魅力を伝えていく、地域課題をみんなでクリアしていく、そういったことをしていく機会がないと子どもは成長して外に出て行ってしまう。また、千葉県には不登校特例校がないが、安房地域にそういった学校を作り、県内各地から来てもらうというアイデアもあるのではないか。地元でうまくいかなかったとしても、この地域で生活しながら少しずつ充電してもらい、地域で受け止め、徐々に社会に復帰できるように成長してもらう。そのようなことも含め、せっかく集まって3回の会議を開いているので、とにかくたくさんアイデアを出し合って、そのうちひとつでも「それいいね」というものが出てくればよい。

③ 地域連携協働校について

【座長】

事務局の説明を踏まえ、地域連携協働校のあり方や実施形態、あるいはこの安房地区での設置などについて、意見をお願いしたい。地域連携協働そのものについての質問でももちろん結構である。

【委員】

学校運営協議会制度について、すでに導入している学校における成果や課題があれば教えてほしい。

《事務局》

コミュニティスクールについては県教育委員会生涯学習課が主管しているが、長狭高校に勤務していた経験から状況について報告させていただく。平成24年に長狭高校と多古高校に導入されたが、当時は高校への

導入事例が少なく、他県から視察が多数来っていた状況であった。その後、段階的に導入を進めており、今年度は館山総合高校にも導入されたところである。県立高校においては現在12校に導入済みであり、最終的には全ての県立学校にコミュニティスクールを導入するという目標のもと計画を進めているところである。

コミュニティスクールの成果であるが、地元と密着している小・中学校と比べ、県立高校は敷居が高く、なかなか教育内容が見えないという声もある中で、コミュニティスクールでは、地域と連携して学校運営協議会を進めていくので、地元企業も含め地域全体で学校を盛り上げるという体制が整い、地域との密着感が増しているということが大きな成果である。長狭高校では、東日本大震災の後に、地域と合同の津波対応の避難訓練を企画して実施している。地域住民が校舎の屋上に避難するものであるが、実際の災害時には高齢者が屋上に上がるのを高校生が補助することができるなど、住民と高校生の距離感も非常に縮まったと感じている。

【 委 員 】

地域連携協働校と地域連携アクティブスクールの共通点と相違点、そしてアクティブスクールの成果があれば教えてほしい。

《 事務局 》

地域連携アクティブスクールについては、中学校時代に様々な事情で思うように力を発揮できなかった生徒が、高校で中学校の学び直しから含めて頑張ることができる、新しいタイプの学校として平成24年度より設置したものである。現在は泉高校、天羽高校、船橋古和釜高校、流山北高校の4校に設置しており、中学校や生徒、保護者からの評価が高く、設置拡充を求める声もあることから、令和4年10月に策定した第1次実施プログラムにより新たに行徳高校、市原高校に令和6年度より追加設置することとした。地域の大学生による学習支援ボランティアや、地元企業と連携したインターンシップなど、地域の力をお借りしながら自立した社会人の育成を目指している。コミュニティスクールや地域連携協働校とは連携の主旨が違うものではあるが、地域の力を借りながら、という部分では共通しているものである。

【 委 員 】

地域の大学生については完全にボランティアでお願いしているのか。

《 事務局 》

学生には往復の交通費を支給している。運営形態としては、近隣の大学から教職課程を履修する学生を中心に、学び直しの授業に合わせて派遣していただいている。

【 座 長 】

新たなスキームということで、意見を出すことがなかなか難しいところであると思うが、事務局から何か補足説明はあるか。

《 事務局 》

ここまで20年かけて郡部を中心に統合を進めてきたところだが、すでに郡部では高校が点在している状況であり、1校減ると学校間の距離がさらに倍になってしまう。公教育としては、近くに通える学校がない、選択肢がない、という状況を防がなければならない。一方で、子どもの数は年々減少しており、学校が小規模化することにより学校行事や様々な活動の活気がなくなってしまう。そのような状況から、地域や近隣の学校に協力してもらいながら、不足する部分を補うような手立てとして地域連携協働校という新たなスキームを提示したところである。

【 委 員 】

安房管内では小中学校の統合を進めているところであるが、子どもたちは充実した学校生活を送ることができており、統合によるメリットもかなりあると感じている。高校において、これまでの統合でどのようなメリットがあったか教えてほしい。

《 事務局 》

直近では君津高校と上総高校が統合し、君津高校に普通科と園芸科が設置された。園芸科については上総

高校時代に比べて志願倍率が上昇した。統合すると、もともとの規模の大きい学校の方に学校の雰囲気は寄っていき、小規模校であった上総高校の子どもたちにとっては、活力ある活動を行うことができるようになったというメリットがある。例えば、部活動の参加人数が多くなり、行事も盛り上がる。少人数でも頑張っているのだが、やはり大規模な中で部活も行事も経験すると、生徒の満足度も変わってくる。

【 委 員 】

安房はこれまで館山市内の4校が統合により2校になった経緯があるが、今後の統合についてはメリットが少ないように感じている。

④ 全体を通して

【 座 長 】

1月に始まった地域協議会も本日で最終回である。これまでの協議全体を踏まえて、あるいは言い残したことがないように、全体を通して御意見ををお願いしたい。

【 委 員 】

安房西高校はじめ私立高校では精力的に教育広報に取り組んでいる。県立高校も今年度は教育政策課の協力のもと、房日新聞に県立4校の広報記事を掲載していただき、管内の全中学生に配付していただいた。今回の入試で安房高校は過去5年で最多の志願者となり長狭高校も4年ぶりに定員を回復したのはもちろん学校の努力もあるが、それだけではなく、こうした様々な支援をいただいたことが大きいと感じている。県ではさらに「県立学校チャレンジ基金」といういわゆるクラウドファンディングがはじまったが、安房高校は現在のところ県下で最大の支援をいただいている状況である。これは、この地域の方々の熱い思いの結晶だと受け止めている。3市1町の首長が揃って県立高校についての陳情書を提出したことについても、他地域ではおそらく考えられない動きであろう。それだけの思いを、制度が妨げているのだとするならば、制度に風穴を開け、すこしでも変えていけるようお願いしたい。

安房地域には南房総市に富浦学園という県下最大の県立児童養護施設があり、鋸南町や館山市にも東京都の児童養護施設である勝山学園や船形学園がある。都会で様々な困難を抱えた子どもたちが、何とか自立してこうという思いでこれらの施設に暮らし、この地域がそれらの子どもたちを支えている。近年は高齢者施設も増加しており、県北で定年まで働き上げた方々が、最後の住まいとしてこの地を選び移り住むことも増えている。このような地域であることから、制度上困難なことであっても、県単独で予算措置を講じるに十分な土地柄であり、千葉県が国に誇れるモデル地域となりうると思う。

【 委 員 】

安房拓心高校も館山総合高校も様々な形で魅力発信を行っている。しかし、実業科に行かせようという形にはならない。両校の取組については近隣の住民からも評価されているが、その住民が自分の子どもをそれらの学校に送ろうとはしない。結果的に安房高校へ、長狭高校へ流れていく。高校が地域とともに頑張っているということが、募集につながらないところが深刻な問題である。中学校の進路指導における選択肢の提示の仕方そのものについて再考しなければならない。地域はこれまでもこれ以上ないくらい県立高校4校と様々な連携を行ってきた。しかし、君津・木更津方面の私立高校が経営努力として安房鴨川駅前までバスを運行し、生徒は私立に流れている。また、県立高校の施設の老朽化も私立志向を助長している。県立高校が選ばれる高校になるためには様々な部分にメスを入れて、学校だけでなく行政も努力をしていかなければならない。地域連携協働校という新しい枠組の中で、どのようなメリットをつけていくのか。教員の加配措置ができるのか。また、地元市町から県立高校に通う生徒に対して、安房地区3市1町として、県として、どういった支援ができるのか。その支援体制をどうシェアしていくのか。本気で考えなければならない。

【 委 員 】

ちょうど昨日が中学校の卒業式で、中学校の教室に入る機会があった。教室には木更津方面の私立高校の掲示物が、その中学校出身の高校生のコメン・顔写真とともに掲載されており、県立高校については同様

の掲示物は確認できなかった。掲示物を通して卒業生が高校で頑張っている様子を知ること、その学校に興味を沸き、学校の特色を知るきっかけになる。その中学校の卒業生の4分の1が実際にその私立高校に進学する予定であり、それが全てということではないだろうが、少しの紹介があるだけでも違うのではないかと感じた。

また、明確な職業観を持った子どもには専門学科という選択肢があつてよいと思うが、そういった見通しがなく勉強が苦手な子どもや、発達障害を抱えた子どもにとっての選択肢として、地域連携アクティブスクールがこの地域に設置されているとよいと感じた。

【委員】

この地域には各高校に特色や魅力があるが、それが志願者数に反映されていない。保護者や生徒のニーズの問題なのか、周知の問題なのか、難しいところではあるものの、地域として魅力があることは間違いなく、その魅力をいかに広報していくかが課題であるとする。県立4校と私立高校がともに切磋琢磨し、地域活性化につながることを期待する。

【委員】

「人口の減少＝高校を統合する」という対応では限界がきており、これ以上の統合は人口のさらなる減少に結び付く。つまり、高校に通えないからこの地域にはもう住めなくなるといった側面もあるだろう。この協議会では、今後も高校を残すために考え得る方策として、例えば35人学級の導入や地区外からの生徒の獲得などが必要との共通認識を持つことができたと感じている。行政の立場としては、この課題に対して、産官学のコーディネーター役の一端を担うことや、各学校での教育資源の開発や提供、さらには地元の就職先についての情報提供など、様々な支援が考えられる。そのような支援を通じて、県立4校の存続に少しでも貢献していきたい。

⑤ 論点整理

【座長】

安房地区の県立高校の在り方ということで、今後の生徒数の減少を踏まえつつ、今後10年を見据えて様々な角度から様々な意見をいただいた。特に現在の4校の存続を願いつつ、地域の子どもの望ましい教育環境を整えるためのご意見を数多くいただくことができた。

以下、個人的な意見を述べさせていただく。まずは、県にはこれらの意見を参考にしつつ法令を超越した取組をぜひお願いしたい。予算のこともあるだろうが、地域の方々にはこれからもぜひサポートしていただきたい。また、県立4校だけでなく、地元の私立高校も含め、共存共栄で今後もお互いに切磋琢磨してほしい。

【座長】

議事の「(2) その他」に移るが、何か議題があるか

(意見なし)

ないようなので、進行を事務局にお返りする。

※会議終了の追加意見（欠席委員より）

印西などはベッドタウンに変化した。館山は若い世代が移り住むには難しい地域だ。子どもの数が増加する見通しは低く、今の状況が続けば、10年後にこの地区に必要な学級数は10学級程度だということもあり、県立4校がこのままの形で残っていくには依然厳しい状況だ。数字の上では将来的には各市に1校ずつあれば十分かもしれない。加えてここ数年、私立もバスを走らせるなど経営努力をしており、単願希望者も増えてきているようだ。将来的に仮に統合するようなことになったとしても、以前行われた統合のように校舎を実習場として活用するなど、この地区に受け継がれてきた学びの歴史を是非尊重してほしい。